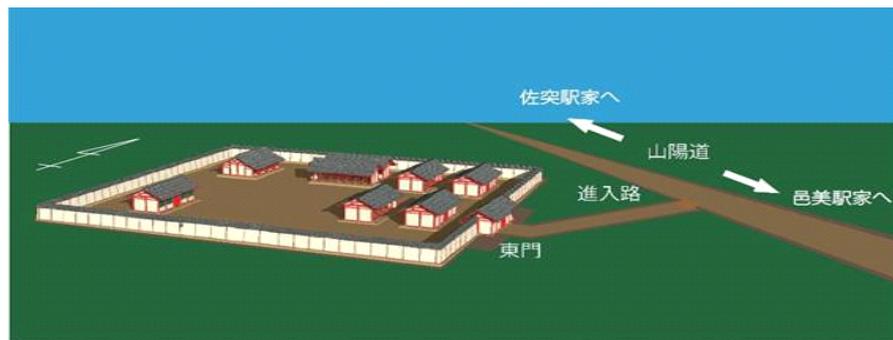
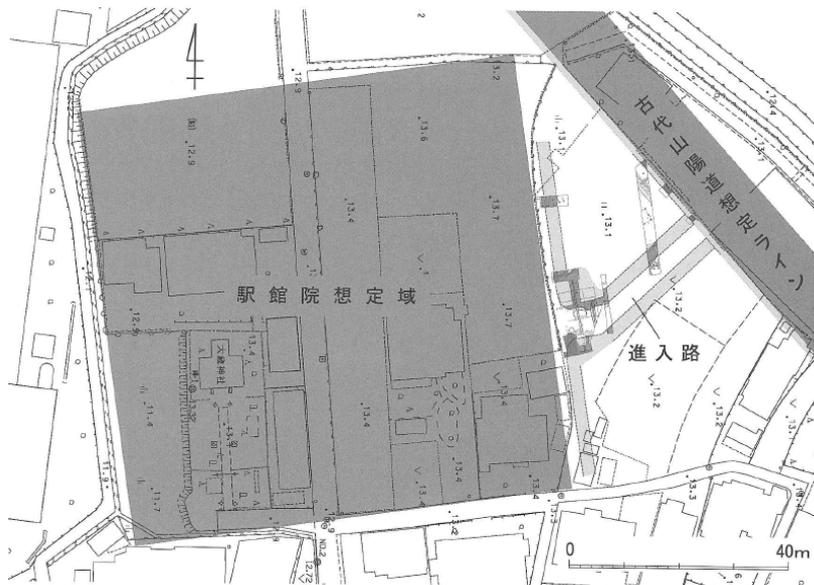


「賀古駅家、発掘ものがたり」 14 <賀古駅家の出入口>



<古代山陽道と賀古駅の接続（推定復元）>

年度を越え、新たに用意した予算で再び調査をはじめることになりました。今回の解決すべき課題は2点あります。1つめは6トレンチで出土した大量の瓦は何を示しているのか、ということです。そのために、トレンチを広く設定し、より状況を詳しく把握することにしました。2つめは方形地割りに沿った奈良時代の溝が賀古駅家とどのような関係にあるのか、というものです。

6トレンチを拡張して発掘していくと、前回調査した大量の瓦の続きが出てきましたが、思ったより範囲は広がっていませんでした。私の推定では、方形地割りに沿った溝は賀古駅家の外側（築地塀）を囲む溝で、溝の中から見つかる瓦は塀の瓦が落ち込んだものだ、というものでした。しかし、発掘した結果、大量の瓦を含む溝は途中で途切れてしまったのです・・・???

そこで、これまでの発掘調査成果全体を見ることにしました。特に、奈良時代の溝に注意し、それぞれのトレンチで見つかった溝をつなげていくと、図のように復元できる

ことがわかってきました。つまり、古代山陽道と駅家との間にできた三角形の隙間に、道から駅家に入るための進入路があったようなのです。駅家を巡る溝が途切れていたのはそこに入口があったからなのでしょう。

こうした調査成果のおかげで、賀古駅家は山陽道に面した東側が正門であった可能性が高くなりました。本来、駅家をはじめ、当時の公的な建物は東西南北に合わせて配置され、施設の入口は南側を向くのが一般的です（平城京や平安京など。朱雀門）。しかし、賀古駅家は古代山陽道が北側を斜め方向に通っているため、東門というイレギュラーな対応がとられたようです。

このような例は上郡町落地遺跡の野磨（やま）駅家にもうかがうことができます。駅家と山陽道をつなぐパターンが分かってきました。

兵庫県立考古博物館 学芸員 中村 弘

